

押川春浪作

オレンジ

橙の花束

朗読

石橋みや子

第一卷 3. 押川春浪「橙（オレンジ）の花束」



押川春浪（おしかわ しゅんろう）

1876年（明治9） - 1914年（大正3）。

明治のキリスト教の長老である押川正義の長男として愛媛県松山市に生まれる。早稲田大学法学部卒。在学中に書いた「海底軍艦」が巖谷小波の推薦ですぐに刊行され、当時の少年読者を熱狂させた。愛国と俠気と冒険の気風を持つ春浪は、続いて「世界武者修行」「武侠の日本」「武俠艦隊」等を発表して作家としての地歩を築いた。冒険小説家の代名詞のように言われた春浪だが、1902年（明治35）に刊行された「万国幽霊怪話」では、ロマンティスト春浪の心優しき一面をよく伝えているといわれている。

「橙（オレンジ）の花束」は、この「万国幽霊怪話」の冒頭に書かれている「伊太利恐怖談」。裕福だった病弱なペテーは、有名なピアニスト、クリスチーナの演奏を聞きたいと言い残し、湖の別荘で亡くなった。その後、別荘に住んだのは不思議にもクリスチーナだった。幽霊となって念願の演奏を聞いたペテーはお礼の徴を残す。

「用語解説」

凄愴（せいそう）

きざはし

幽界（ゆうかい）

すさまじくいたましいこと

階段

死後に行くという世界。あの世

オレンジ

うる イタリー ローマ
橙の花美わしき伊大利の羅馬府に、ペテと呼べる一人の奇麗な娘が住んでいた、

家は富み、身に不自由もなき境遇でありながら、重き肺の病にかかつて、もうどうしても
まくら
枕が上らない。その母は痛く氣を揉み、

「コレ、ペテや、お前は本当に可愛そうな娘だよ、何かこの世で最う一度見たいとか、聴
きたいと思うものはないかえ。」と言うと、ペテは蒼白あおしろき顔を上げ、

「はい、お母様 妾わたしはもう早かれ晩かれこの世を去るのですが、どうかそれまでの内

に、最う一度聴きたいと思うのは、有名な令嬢クリスチーナのピアノの弾奏しらべと、真に見た

いと思うのは、かつてお母様などと遊んだ事のある、ブラシアノ湖を遥はるかに見渡す 聖セントシ

モン山ざんの景色とです、この二つの 望のぞみの遂げられぬ内は、何んだか死んでも天国へは行

かれぬように思われます。」と糸のようなる声は、まさに消えんとする灯火ともしびよりもな

お哀れである。

母親はこの声を聴いて真に断腸に堪えぬ、どうか娘の望みを叶わせて遣りたいものと、
先まずクリスチーナの許を訪ずれて見ると、彼女は当時は有名なる音楽婦人なので、その頃
は恰ちようどなみじ度波路遥かなる英国の王宮に招かれて、この地にはおらぬというので詮せんかた方なく
家に帰ったが、この望のぞみが叶わぬものならば、せめては猶いま一つの望なる、かの美わしき
山の景色の間にて、安らかにその魂を天に帰さんと思つたので、もとより愛する娘の事では
あり、家には限りもなき富があるので、直ちに数万金すなげうを拗なげうつて、聖シモン山の中腹ちゆうぶく
は、遙かにブラシアノ湖の風雅なる景色を見渡す地面を買求め、夜を日についで、一軒の
荘麗なる別荘も出来上れば、ペターは担架に乘せられて、その母と共にこの別荘に
引移る事になった。

この別荘の風光は実に天下の絶景である。ことにペターの病室と定まつた楼上にかいの一室は、
その窓から遙かにブラシアノ湖の緑の波を見渡し、
晨あしたの雲は白く、
夕ゆうぐの雲は赤く、

たとえばレオンハルトの油画にでもありそうな景色である。

ペテーはこの別荘のこの室へやに引移つて来てから、朝から晩まで窓の方に向つたまま、

真にその景色も眼まなこの底に入つてしまふかと思われるほどであつたが、かかる美わしき景

色ながを眺めたとして、死しにびよう病なほと定まつた肺病の癒なおろうはずはなく、遂ついに六月二十八日の

午後十一時半、不意に悴やつ懽もたれた顔を擡もたげて、ハラハラと涙を流しながら、

「お母様、死にたくないわ、此こん様な奇麗な景色と、この別荘とを遺のこして死にたくない

わ、またクリスチーナのピアノの弾奏しらべを聴かずに死にたくない。」と言いながら、天命の

定まるところ詮方もなく、ガツクリと崩くずれお折れ、両眼を開いたままこの世を去つてしまつ

た。

ペテーが死んだ迹あとでその母親は、何か恐ろしき物でも見たものと見え、直ちに此処ここを

立去つて、間もなくこの別荘は売物に出た。しかし母親は何事をも語らぬので、世間では

無論ある秘密の潜んでいようなどとは夢にも知らず、ただその二階の一室で、一人の奇麗な娘が死んだという事を知っているばかりである。

然るにそれから十ヶ月ばかり過ぎて、この山腹の明媚うるわしき景色と、この別荘の風雅なる建築つくりとを好みにて、大金を投じて此処を買求めたのは、不思議にもかの有名なる音楽婦人のクリスチーナであつた。彼女はペターがその音楽を聴きたい聴きたいと言つて生きていた間は、英国の空遠く、その死後漸ようやくこの国へ歸つて来たのである。

クリスチーナにもやはり一人の母親がある、俱ともにこの別荘へ引越して来て、やがて彼女の居間いまと定まつたのは、かつてペターが死んだ楼上にかいの一室である、尤もつともこの室へやがこの別荘中、見晴し第一等といわれているので、かく定まつたのも決して無理ならぬ事である。

クリスチーナの一家がこの別荘へ引越して来た当時は、別に怪あやしいと思ふ事もなかつた

が、さて或日の事である、イヤ、或日ではない、六月二十八日の夜の事である、この夜はかの薄命なるペテーが死んだ、ちようど恰度一週年目に当っているので、当夜は月ことに美わしく、オレンジ橙の花の香かおりが、涼しい風と共にスースーと吹いて来るので、クリスチーナは唯ただ一人、彼女の室の窓辺に近く椅子に凭れて、まどべシーンと澄み渡つたる空を眺めている、時刻はあたかも置時計が、、、、チーンと鳴る十一時三十分、、、、フト耳を澄すと怪しむべし、この別荘の何処かの扉が、どこと不意にピーンと開いたようで、たちま忽ち彼方の階段に当り、きざほしミシリツ、、、、ミシリツと、何物かがいと忍びやかに昇つて来るような足音が聴える、きこハテナと思う内に、その何物かは早や階段を昇り詰めたようで、長い長い廻廊をだんだんと此方へ、こなたその頃伊太利貴婦人間に流行する、クオン絹のもすそ裳の摺れる音は、、、、サラリツ、、、、サラリツと、同時に優やさ美しき女靴おんなぐつの音は、ギユツ、ギユツと、一步々々近づき、やがてその足音は、この家のドア闔の直ぐ外にヒタと停とまった。

クリスチーナはいと怪訝いぶかしき事に思い、

どなた「誰方？」と一声呼んで見たが、何んの返事もない。再び、

「誰方？」と呼ぼうとすると、この時何故なにゆえか身の毛も竦立よだつような悪寒さむさを覚えたので、ハッと心付いたクリスチーナは、天性よほど沈着おちついた婦人である、かつて薄命うすななるペー

が、此処で涙を飲んで死んだ事をば知っているのです、そのまま黙もくつて首こうべを垂たれていると、

暫時しばらくして闔ドアの外なる何物かは、さも失望したと言わぬばかりに、再び踵きびすを廻めぐらし

て、絹の裳の摺れる音はサラリッ、サラリッと、寂しんと静まり返つたる長廊下に、優しき

女靴は陰ひびきに響きざはして、またもや階段くだを降る音は、ミシリッ、ミシリッと、だんだん遠く

何処いずこへか立去つてしまった。

クリスチーナは真せいそうに悽愴せうじやうの感に堪えぬながらも、ただ謹慎つつしみ深き婦人であれば、その

翌日他人ひとに会うても何事をも語らず、自ら意中こころに深く思い定めて、その夜も楼上にかいの室に

唯一人、故と入口の闔ドアをば開き、一心に神を念じつつ、椅子いすに凭れて心待ちに待っていると、案の通り夜も次第々々に更ふけ渡りて、十一時三十分を報ずる置時計がチーンと鳴ると、何処ともなく扉とびらの開く音物淋しく、ミシリツ、ミシリツと階段きざはしを昇りて、絹の裳もすその摺すれる音も、女靴の異様な響も昨日の如く、長廊下をだんだんと近づき、やがて何者かは開いたる闔の外にヒタと停ったようだ。

このような場合にはとても身動みうごきも出来るものではない、けれどクリスチーナは思いを決し、ソツと首こうべを擡もたげて見たが、何んにも見えない、何んにも見えないけれど何物かは、その場に立こなたつて此方の様子を窺うかがつてゐる事が分る。

クリスチーナはかくと知るより、静かに椅子を離れて入口の方かたに進み寄つた、凡そ幽靈婦人が立おちつつてゐると覺しき処より四、五尺離れて、あたかも生ける人に物言う如く、

「ペテーさん。」と一声呼びかけた、その声は真まことに沈着いた優しい声である。

「ペテーさん、貴女はあなたペテーさんの幽霊でしょう、妾わたしはクリスマスチーナですよ、貴女がこの室でお死なくなり亡ほのになった事は、妾もおも仄かに聞いております、貴女が今夜再び幽界から此処に迷うて来たのは、何かまだこの世の中に念おもい遺す事があるのでしよう。妾はその事をも仄かに聞いておりますので、どうか充分に貴女を慰め、また染しみ々じみとお諭さとし申したい事がありますから、若し貴女の霊が好むならば、明晩同じ時刻に、更あらためて此処へお出でを願います。」と言うと、ペテーの幽霊と覚しきものは、眼に姿は見えず、耳に声は聴えぬけれど、あたかもこの一言ごんを承諾せし如く、忽ち踵を廻らして、絹の裳もすその音も微かすかに、何処いづくともなく消え去った。

幽霊婦人とかかる約束を結んだクリスマスチーナは、その翌日とも相成れば、己すまが住える楼上にかいの一室をば綺麗に清め、あたかも王侯貴人を迎うるが如く、橙オレンジの花をもつて隔間すきまなく飾り、また一脚の華麗りっぱな椅子には、白絹しらぎぬを蔽おうて室の中央まんなかに据すえ、自分は朝か

らピアノ台に対し、彼女が如何なる人に所望されても、滅多には弹奏かぬという一世一代の曲、「天使の歌」と「夢の世の曲」とをば、繰返し繰返し幾度復習したかも知れぬ。その内に日は暮れ、夜は深々と更け渡る十一時三十分になると、果して遠くで扉の開く音は前夜に変わらず、階段を昇る音と、長廊下を近づく絹の裳の摺れる音とは、例よりやや急がわし気に、やがて足音はヒタと室の外に停り、コトコト、コトコトと闔を敲くのは、まさしく幽霊婦人が訪ずれて来たのに相違ない、かくと聴くよりクリスマスチーナは、「お入り。」と言いつつ静かに立って闔を開き、少し身を避けて待っていると、影も形も見えないけれど、何物かは会釈してその前を通り過ぎしが如く、絹の裳の摺れる音は、サラリツ、サラリツと室の中へ入って来た。クリスマスチーナは最早少しも恐いと思つてはいない、その手を取らぬばかりにして、室の中央の白絹を以て蔽われたる一脚の椅子を指し、

「ペテーさん、イエ、ペテーさんの幽霊よ、よくこそ約束を守ってお出で下さいました、どうかこれへお掛け下さい。」という、不思議やその椅子は、何物かが腰を下せし如く、静かにキーと鳴った。それと知るより彼女は美わしき面おもてに溢るるばかりの微笑を湛え、

「オー、ペテーさんの幽霊よ、今夜はわざわざ招待まねき申したのですが、何も特別にお待遇もてなしをする仕方ありません、ただ妾わたしは妾のあらん限りの技術ちからを尽して、自分の一

世一代ともいうべき「天使の歌」と「夢の世の曲」とをお耳に入れたく思うのです」と、言いつつ、蓮歩れんぽを移して、側かたわらのピアノ台の上にと登ったが、この時のピアノの演奏は、

実に何処の王宮でも聴く事の出来ぬ微妙たえなる演奏しらべであつたらう、彼女は先ず「天使の歌」を弾じ、次に「夢の世の曲」にと移つたが、その五本の織指ゆびには神宿るかと思われ、盤上玉まろを転まろばすが如き美わしき響こころには、室の四辺まわりに飾られたる橙オレンジの花も笑えみを含まんばかりで、彼女自身すらも恍惚こころとして我を忘るるほどであつた。

ピアノの弾奏中、かの白絹を以て蔽われたる一脚の椅子が、折ふしキキ、キキと異状いように鳴りひびくのは、もし其処そこに人あらば、真に感に堪えぬという面色おももちであろう。

しばらく

暫時してクリスチーナはピアノの弾奏を終り、痛く疲労した様子でピアノ台を降りて来たが、何思ったかこの時自分の椅子をば、かの白絹を以て蔽おおわれたる椅子の直ぐ前に据え、流るる汗を押し拭おしぬぐいつつ、静かに其処に腰を下し、露のように、麗うつくわしき眼を揚げて、凝じつ乎とその正面を見た、その状さまはあたかも無形の幽霊の顔を眺めんとする如く、ハッキリとした声は少し震いを帯びて、

「ペテーさん、イエ、ペテーさんの幽霊よ、貴女は唯今の「天使の歌」と「夢の世の曲」
とお聴き下さいましたか、まことに不束ふつつかなる弾奏しらべでお恥かしうございますけれど、

わたくし

ちから

妾めかけが妾のあらん限りの技術ちからを尽して、かかる弾奏をお耳に入れましたのも、どうか貴女ふるまいの靈魂を慰め、また貴女の振舞ふるまいについて、ただ一言のお諭しを申したいためです、貴

女は何んで神の栄光の許もとを離れて、この塵ちりの浮世に迷うて来ましたか、貴女は最もうこの世の人ではありませんまい、この世の人でなければ安らかにその靈魂たましいを天に帰すべきはずです、この夢のようなる浮世の消ゆべき財宝たからや、浅墓あさはかなる樂たのしみに念おもいを遺すのは、決して神を信ずる者の仕業しわざではありません、妾は切に貴女のお心得違いのほどを悲しむのです、それで今夜「天使の歌」と「夢の世の曲」を弹奏したのも、貴女にこの意味こころみを悟らせんがためです、たとえ妾のピアノの弹奏は拙つたなくとも、静かなる夜の音楽の調しらべは、天に達するときえいわれておりますから、貴女はすべての煩惱ぼんのうを解脱げだつして、この音楽のリズムに辿たどって、永久に天の栄光の許にお帰りあらん事を望むのです。」と言いつつ、一段と声に力を入れ、

「ペテーさん、お分りになりましたか、もし妾の言う事がお分りになりましたら、貴女は天に帰る証拠として、何か妾に一つの顯現しるしを見せて下さい。」と言い終って、クリスチ

ーナは静かに首こうべを垂たれ、両眼を閉じて一心に神に祈いのり禱ささを捧たげている。夜はシーンと更
け渡よつて、真に身の毛も竦よだ立つほどであつたが、と、この途端だ、忽ちグワタンと、何物
か微塵みじんに砕け散つたような響と共に、ピカピカと一道の電いなびかり光は、閉じたる眼まなこを
も射る如く、その電光の間より、雲とも見ええず、煙けむりとも見ええず、真白な衣を曳ひける女の
姿が朦朧ぼんやりと現あらわれて、チラ、と此方こなたを振向くとそのまま、スウ、と風の如く何処いずこへか消
え去つた。

クリスチーナはこの様を見るより呀あつと叫んで、椅子と共に床に倒れて、悶絶もんぜつしてし
まった。

果してペターの幽霊は、その翌晩からこの別荘に現われなかつた。

すると、それから三日目の夕暮の事である。クリスチーナは最早ペターの靈魂をば、安
らかに天国へ帰したと思うので、心うれしく、景色よき郊外を逍遙さんぽして、例の別荘へ帰

つて見ると、遥はるかにブラシアノ湖の緑の波を見渡す、己おのが楼にかい上の座間いまの卓子テエブルの上に
は、何時いつなんびと何人が携えて来たのかも知れず、活いきいき々とした橙オレンジの花束が遺してあった。

クリスチーナは不審に思いながら、その花束を手を取って見ると、雪に黄金こがねの照り添う
如きその花びらには、ただ「ありがとう」の文字が微ほのかに現われていったが、その美わ
しき色といい、その香かんばしき匂においといい、真にこの世のものとは思われなかった。